

25. 本院における心疾患患者の妊娠、分娩について

(産婦人科) 高橋 文子・原 君代

○笹本 佳子

1955年1月1日より1963年7月31日までの本院における分娩総数3391例中、心疾患患者の分娩数99例、人工妊娠中絶手術96例を経験したので報告する。

心疾患による分娩例数99例中心疾患名の分類は、M.S. 39例、M.S.I. 8例、M.I. 7例、A.S.D. 12例、V.S.D. 7例、Bottalo 5例、P.S. 1例、Extrasyst. 4例、Angeborene Herz fehler 9例、その他7例であった。

また分娩様式は、普通産89例、鉗子分娩3例、骨盤位分娩2例、帝王切開5例であった。

分娩時死亡は母体死亡1例、胎児死亡1例であった。

26. 小児喘息の心理学的特徴について

(小児科) ○笠井 和・高橋 艶子

菅井カクイ・伊村 和子

(東一、二宮分院) 浅野 知行

気管支喘息の病因、本態に関しては、種々の説が述べられているが、近來アレルギーの研究が広く行なわれるようになり、本態としてはアレルギー反応であつて、他の諸種の因子はこの反応を誘発するという見解が多くなつて来た。体質、遺伝、気候、環境、精神的諸因子等の中でも、精神的(心理的)影響を見逃すことはできないと思われるので、小児喘息の児の精神面を、両親の態度、子供の知能、性格等について心理学的に考察した。

対象は、国立東京第一病院二宮分院に入院している喘息患児30名とその両親で、研究方法としては、環境の面、特に親と子との関係を見るために田研式親子診断テストを使用し、知的面は田中ピネー式知能検査を、更に性格面は精神力動的な面を見るために、C.A.T. テストおよび Rorschach エストを使用した。

今回はその中の環境面、特に親子関係について報告する。

調査の結果、喘息児をもつ家庭には、それぞれ共通した親として子に対する関係が見られることがわかつた。子供に対する両親の態度が父親、母親ともに、大きな期待と不安を持ち、その反面に溺愛と盲従をも持っていることが明らかに認められたのである。

27. 乳児心臓外科

(心研) 榊原 仟・高尾 篤良

蛭名 勝仁・○豊田 義男・三森 重和

臼田多佳夫・小柳 仁・池田 祐之

(麻酔科) 岩淵 汲

乳児期における心疾患の臨床像は、その重症度、合併

症、発育に及ぼす影響、死亡率、診断および治療の困難さにおいて、小児期、成人期のそれと、いささか趣を異にする。しかしながら、幼若乳児でも外科的に、根治的、部分的、あるいは対症的になんらかの治療を加えて救命し、また乳児より小児期への成長発育に好影響を与えうる例が少なくないと思われる。われわれの乳児心臓外科は未だその緒についたにすぎぬが、経験例をもとにその問題点について述べてみる。

1) 肺動脈高血圧を伴つた、重症心室中隔欠損症、心内膜床欠損症に対する肺動脈狭窄作製術、あるいは直視下開心術。

2) 動脈管開存症に対する肋膜外より行なう結紮術。

3) 重症大動脈絞窄症の治療。

4) 心内膜線維弾力症の治療。

5) 重症肺動脈弁狭窄症に対する弁切開術。

6) 肺血行減少性右左短絡心奇形、ファロー四徴症、肺動脈閉鎖症、三尖弁閉鎖症、両大血管右室起始症の治療としてプレロック吻合術、あるいはグレン吻合術。

7) 大血管転移症に対する心房中隔欠損作製術、あるいは静脈系置換術。

8) 総肺静脈還流異常症の治療。

9) 左室発育不全症の診断等について。さらに、術前、術中、術後の麻酔および呼吸の管理についてその特殊性についても述べる。

シンポジウム

「糖尿病」

I. 糖尿病の病態

1) 糖尿病の病理

(病理) 教授 今井 三喜

糖尿病はその経過の間で、代謝面の可逆的異常から、不可逆的な臓器組織の器質的病変を起すようになると。Organfehler を伴う病気の新しい局面が展開される。なかんずく、心臓血管系の変化は、今日では糖尿病の合併症として、また死因として第一にあげなければならぬ。今回は、教室の17例の剖検例を参考として、糖尿病性毛細管障害(腎、網膜病変を含む)、動脈硬化の問題を中心として考察する。

なお、定型的な糖尿病剖検例の数例を展示して、専門外の方の御参考に供したい。

2) アセトン代謝について

(生化学) 教授 松村 義寛

糖尿病におけるブドウ糖代謝の障害はオキサロ酢酸の不足を招き、アセチル-CoA のTCAサイクルへの導入